

能楽研究所彙報(昭和51年4月～53年3月)

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

能楽研究 : 能楽研究所紀要

(巻 / Volume)

4

(開始ページ / Start Page)

207

(終了ページ / End Page)

216

(発行年 / Year)

1978-07-31

能楽研究所彙報

(昭和51年4月～53年3月)

〔鴻山文庫〕受贈〕

当研究所顧問江島伊兵衛氏は、前号に記した如く、昭和50年10月10日に逝去されたが、氏が多年にわたって収集された能楽関係図書を集積たる「鴻山文庫」の一切が、御遺族の御好意から学校法人法政大学に寄贈され、当研究所内に鴻山文庫の名を残して保管活用されることになった。

寄贈実現までの経緯の詳細は別の機会に譲るが、昭和51年4月6日に、法政大学総長会議室に於いて、寄贈者代表の江島喜和子氏・江島尤一氏、受贈者たる学校法人法政大学を代表する中村哲理事長、契約参加者(株式会社わんや書店代表取締役)村山三郎氏、立合人(故江島伊兵衛遺言執行者)弁護士内藤頼博氏の出席のもとに、舟橋尚道学務理事・広末保能楽研究所長ならびに能楽研究所員も同席して、同日付の「鴻山文庫寄贈契約書」の調印が行われた。寄贈者の御好意はもとよりのこと、寄贈実現のために傾けられた内藤弁護士の御努力にも、厚く感謝したい。

右の契約書に基づいて、法政大学は麻布校舎の能楽研究所に隣接する一室を「鴻山文庫」専用の書庫として改造し、書架・耐火金庫・除湿器等の諸設備を整えた。また52年3月から8月にかけて、品川区大井の江島宅に於いて所員が仮目録の作製を急ぎ、目

録作製ずみの分から順次能楽研究所への移管を開始し、処置未決定の分や一部の未出文書を除いて、8月末にほぼ移管を終了した。

移管後の整理に約一ヶ月を費し、一応の収納が完了した段階で能楽研究所創立二十五周年と「鴻山文庫」受贈との両方を記念する行事を10月末に開催することを決定し、契約書に定められていた「寄贈に至る経緯及び寄贈のことを関係方面に周知させるための処置」として、左記の如き文書約千通を能楽関係者・研究者、新聞社等に10月上旬に発送した。

「鴻山文庫」受贈のお知らせ

謹啓 爽秋の候、各位にはいよいよ御清栄のこととお慶び申し上げます。

さて、株式会社わんや書店元社長江島伊兵衛氏(昭和50年10月逝去)の御蔵書で、能楽専門の文庫として著名な「鴻山文庫」が、このたび、御遺族(江島喜和子氏・江島尤一氏・蒲生靖子氏・富森孜子氏)の御芳志から、学校法人法政大学に寄贈され、野上法政大学能楽研究所内に「鴻山文庫」の名を残して別置し、保管・活用されることになりました。

「鴻山文庫」―「鴻山」は「江嶋」の二字を組み替えての名称―は、江島氏が昭和10年頃から苦心を重ねて蒐集・整理された蔵

書で、重要文化財二点を含む古今・諸流の謡本約千七百種を初め、謡曲注釈書・伝書・型付類・史料・狂言本・図版・雑誌など、能楽のあらゆる分野にわたる文献資料約一万点が集成された、質・量ともに比類のない能楽資料の豊庫です。江島氏が『車屋本の研究』『図説光悦謡本』などの著書で知られる学者でもあり、学問的研究に理解深く、希望者には喜んで資料を提供しておられたため、同文庫が能楽研究の進展に寄与した功績は極めて大きなものでした。

その「鴻山文庫」の一切が法政大学に寄贈されましたのは、「学界・能界に役立つ形で文庫を後世に伝えたい」との江島氏の御遺志を継承された御遺族が、法政大学能楽研究所に置くことが最もふさわしいと判断されたことによるもので、昭和51年4月に「鴻山文庫」の名を永久に残すこと、能楽研究所の他の蔵書と等しく一般に公開すること、移管後三年以内に目録を公開することなどを内容とする寄贈契約書を交換し、本年8月末に能楽研究所への「鴻山文庫」移管の作業をほぼ終了いたしました。

法政大学といたしましては、寄贈の御趣旨を尊重し、「鴻山文庫」の保存・管理に万全を期すのはもとよりのこと、能楽研究所において整理と目録の作成を急ぎ、すみやかに公開して能楽研究に資することによって、江島氏の御遺志、ならびに寄贈者の御芳志にむくいる所存でございます。すでに『鴻山文庫本の研究―謡本の部―』（表章著。昭和40年わんや書店刊）所収の謡本については整理を終えており、明春から閲覧可能ですが、その他の分についても、整理終了次第、移管時の仮目録に基づいて順次に公開

いたします。また、本年が能楽研究所創立二十五周年にあたりますので、「鴻山文庫」受贈との両方を記念して別紙記載の如き能楽資料展と講演会を催し、「鴻山文庫」の貴重本・稀覯本を一堂に展観して、同文庫についての一般の御理解を深めていただくことを期しております。

以上、江島伊兵衛氏の三周忌の日にあたり、同氏の御冥福を祈りつつ、謹んで「鴻山文庫」受贈の事を御報知申し上げます。

昭和52年10月10日

法政大学 総長 中村 哲

野上
記念
法政大学能楽研究所長 山崎 正一
能楽関係者・研究者 各位

右の文書に、所長山崎正一名義の「能楽資料展・講演会のご案内」と「能楽資料展出品予定書目（抄）」をも同封して発送した。その能楽資料展・講演会、ならびに「鴻山文庫」受贈披露のパーティーも盛況裡に終了し、「鴻山文庫」受贈のことは各方面に周知徹底し得たものと信じる。

なお、受贈のお知らせにも記したように、「鴻山文庫」のうち、『鴻山文庫本の研究―謡本の部―』所収の分は、すでに整理を終了し（但し一部移管未了のものがある）、本年四月から一般に公開している。それ以外の分も、移管時の仮目録に従って、研究者には閲覧の便宜をはかっている。希望者は前もって連絡のうえ遠慮なく来所せられたい。

〔鴻山文庫受贈・創立二十五周年記念行事〕

前項に述べた如く、昭和52年8月に鴻山文庫の当研究所への移管作業が一応終了したが、同年が研究所創立二十五周年にあってもいたので、その両方を記念し、別記の如き能楽資料展・講演会、ならびに受贈披露のパーティーを開催した。能楽資料展・講演会の案内として「鴻山文庫」受贈のお知らせに同封して各方面に発送した所長山崎正一名義の文書の文面は左の如くである。

能楽資料展・講演会の御案内

野上
記念 法政大学能楽研究所は、昭和27年に創立され、本年が二十五周年にあたります。この間、各位の御後援を得て、能楽資料集成刊行等の事業も順調に進展し、年々資料も充実して、近年は狭いながらも能楽研究の中心的機能を発揮しつつあるものと自負しております。

また、別紙に御報知申し上げました如く、このたび、故江島伊兵衛氏の御蔵書「鴻山文庫」を受贈し、それを含めた能楽研究所の資料は、古今未曾有、これ以上は望めないほど豊富なものとなりました。

つきましては、研究所創立二十五周年と「鴻山文庫」受贈とを記念して、左記のような能楽資料展と講演会を開催し、当研究所資料の充実ぶりや「鴻山文庫」の豊富な内容を知っていただく機会にいたしたいと存じます。御多忙中ではごさいましようが、ぜひ御観覧・御来聴いただきたく、御案内申し上げます。

昭和52年10月10日 (別記の記事省略)

右の文書とは別に、研究所名義のハガキ(能楽協会・能楽懇談会・中世文学会等の会員に送付)とチラシ(能楽堂等に配布)を作り、また西野所員作成のポスターを学内や書店等に掲示するなどして、催しの周知をはかった。

〔能楽資料展〕

昭和52年10月28日(金)・29日(土)・30日(日)の三日間(午前10時～午後4時30分。但し29日は午後5時まで)、霊友会釈迦殿小谷ホール(港区麻布台一―七―八)で開催、金春禅竹筆『明宿集』、車屋謡本・光悦謡本など、重要文化財二点を含む鴻山文庫の貴重本と、能楽研究所の蔵本、および寄託の般若窟文庫・観世新九郎家文庫の貴重本など、計五四九点を展観した。当初は約三百点を出品の予定で案内状にもその旨を記してあったが、会場を実検してその広さを確認した結果、予定を大幅に越える点数を展観することになったものである。

当日は解題付きの「能楽資料展出品書目」(所員の総力を結集、徹夜を重ね、印刷所に無理を願ってようやく間に合った)を実費頒布し、また『鴻山文庫本の研究』より抜き刷りした江島伊兵衛氏執筆の「鴻山文庫について」を小冊子にして配布、江島氏の著書も展観し、江島氏の蒐書の偉大さと能楽研究所の充実ぶりを見ていただいた。中世文学会と能楽研究所が共催した昭和37年の世阿弥生誕六百年記念展覧会以来の大規模な資料展であり、宣伝期間が短かかったにもかかわらず、学内外の関係者をはじめ、遠方からわざわざ上京された研究者、江島氏とゆかりの深い書店主や能楽師の方がたの顔も見え、すこぶる盛況であった。參觀者は延

約五百名で、二度・三度と来場された方もある。

〔講演会〕

資料展第二日の10月29日、同じ会場で、一時展観を中止して、午後2時30分から講演会を開き、4時10分に終了した。演題と講師は次の通りである。司会は片桐登所員。

あいさつ

法政大学総長

中村

哲

江島伊兵衛氏の人と業績

能楽研究所所員

古川

久

能楽研究の現状と展望

能楽研究所所員

表

章

なお、古川所員の講演は、一部補訂し、「江島伊兵衛氏の鴻山文庫」と改題し、雑誌『法政』昭和53年23月号に掲載された。表所員の講演は、展観した書物と関連させ、江島氏の業績にふれながらの展望であったが、これも若干加筆訂正して、『観世』昭和53年8・9月号に掲載される予定である。

〔鴻山文庫受贈披露パーティー〕

講演会終了後、展観を再開し、午後5時から会場を小谷ホール集會室に移して、能楽関係者・研究者など江島氏とゆかりの深い方がたや学内の関係者等、約百名を招いての鴻山文庫受贈披露のパーティーに入った。参加者には、江島伊兵衛氏略歴と主要著述目録、鴻山文庫の概要を記した印刷物を配布し、会場には江島氏の遺影を飾り、著書をも添えた。式次第は次のとおりで、司会は表章所員。

開会の辞

法政大学能楽研究所所長

山崎

正一

挨拶

法政大学総長

中村

哲

挨拶

寄贈者代表

江島

尤一

祝 辞

国文学者

山岸 徳平

続いて人間国宝野村万蔵氏の音頭で乾盃して祝宴に入り、宴半ばに、江島氏の遺言執行人として寄贈に尽力された内藤頼博氏や寄贈者の江島喜和子氏・富森孜子氏、研究者を代表しての横道萬里雄氏などの挨拶や祝辞があり、和やかな歓談のうち、7時過ぎに散会した。旅行の御予定を中止して出席された江島喜和子氏、退院直後にもかかわらず御挨拶くださった江島尤一氏、札幌から上京なさった富森孜子氏の寄贈者御三方をはじめ、御多忙中を御出席くださった各位に厚く御礼申し上げる。また不慣れのため、当然お招きすべき多くの方に御案内を差し上げていなかったことに後日気付いた。深くお詫び申し上げます。

能楽資料展・講演会・披露パーティーを通じ、霊友会からは、会場の貸与、展観ケースの貸与のみならず、あらゆる面で絶大な御後援・御協力を賜わった。重要文化財を含む貴重文書の展観は消防法上の規制があつて場所が限定されるが、霊友会釈迦殿小谷ホールはその条件を満たすのみならず、広さといい、卷子本を並べやすい長椅子といい、能楽資料展には理想的な場であった。来会者には展観資料の優秀さのみならず会場の豪壮さに驚嘆し、よくこんな場所を借りられたものだとの声を発する人が多かった。無料貸与と聞けばなおさらであろう。後日、山崎所長から霊友会に感謝状を贈呈したが、御好意は誠に忘れ難いものがある。

また、展覧会の諸準備、会場での案内その他に、法政大学大学院学生および西野ゼミナールの学生諸君のみならず、日ごろ能楽

研究所を利用しておられる方がたからも御協力いただいた。心から御礼申し上げます。

なお、能楽資料展のために作った「能楽資料展出品書目」は残部があり、希望者には実費（送料とも五百円）で頒布している。

〔能楽資料集成の発行〕

わんや書店と提携して昭和48年から刊行を開始した「能楽資料集成」は、既刊の五冊（『下間少進集Ⅰ』『細川五部伝書』『下間少進集Ⅱ』『法音抄Ⅰ』『法音抄Ⅱ』）に続いて、左の二冊を刊行した。鴻山文庫受贈のことがあって所員の仕事が増大したため仕事が遅れているが、53年度には旧に復する見込みである。

『下間少進集Ⅲ』（昭和51年8月25日発行）第6回配本。

片桐登所員の校訂。『叢伝抄』『能之留帳』『起請文帖』『下間少進書状』を翻印。解説と、『下間少進集』全三冊分の諸伝書の固有名詞と主要語句の索引を付けた。B6版、二六二頁。会員頒価二一〇〇円。

『鷲流狂言伝書 萬聞書』（昭和52年3月15日発行）第7回配本。

古川久所員と永井猛氏（法政大学院博士課程在学）の校訂。新出資料の鷲流狂言伝書宝暦名女川本（檜常太郎氏蔵）の中の一冊たる『万聞書』を翻印。解説と索引を付した。B6版、二六六頁。会員頒価二一〇〇円。

〔観世宗家所蔵文書目録〕

創立二十周年記念事業の一環として調査を進め、昭和47年4月

号以来雑誌『観世』に掲載している「観世宗家所蔵文書目録（附解題）」は、「七、江戸期書写謄本」を、同誌51年8・9・11月、52年2月の各号に引き続いて掲載した。この仕事も鴻山文庫受贈のため中絶状態であったが、53年度後半から再開の予定である。

〔紀要「能楽研究」の発行〕

昭和52年3月20日付で研究所紀要第三号を発行した。A5判一七六頁で、内容は次の通りである。

| | | |
|--|----|-------|
| 大和猿楽の「長」の性格の変遷（中） | 表 | 章一 |
| 江戸時代初期素人能役者考 <small>「役者目録」を「中心に」</small> | 片桐 | 登三 |
| 幕末の観世勸進能 | 古川 | 久一七 |
| 東京能楽鑑賞会の記録―番組補正、その他― | 小山 | 弘志 一三 |
| 研究展望（昭和50・51年） | 片桐 | 登三 |
| 能界展望（昭和50・51年） | 西野 | 春雄 一三 |
| 観世新九郎家文庫目録（中） | | 一七〇 |
| 江島伊兵衛氏の略歴と業績 | | 一七〇 |
| 能楽研究所彙報 | | 一七三 |

なお、紀要の第二号、第三号には残部があり、希望者に実費で頒布している。送料とも第二号一〇〇〇円、第三号一三〇〇円である。

〔雑報〕

所長の交替

文学部長が兼務することも原則とする当研究所の所長は、文学

部長の交代に伴い、51年4月1日付で鈴木幹人教授(教育学科)から広末保教授(日本文学料)に替り、52年4月1日付で広末教授から山崎正一教授(哲学科)に替った。

竹本所員の就任

52年4月1日付で竹本幹夫氏が兼任所員に就任した。氏は早稲田大学大学院博士課程の単位取得を終了したばかりの気鋭の研究者で、鴻山文庫の整理と目録作成が主たる任務である。

研究所と蔵書の紹介

日本私立大学連盟発行『大学時報』一三五号(昭和52年7月)の研究所点描に当研究所がとりあげられ、表章所員が執筆。また国立音楽大学付属図書館発行「塔」7号(一九七七年5月)が、資料・日本の伝統音楽として東京近郊の日本音楽関係資料を所蔵する図書館を特集し、七つの機関をあげ、当研究所も紹介された。

法政大学発行『法政』に連載中の「法政大学の蔵書紹介」は、第10回目から当研究所の番となり、〈能楽関係資料〉のタイトルで、まず最初に52年11月号と53年23月合併号に「鴻山文庫」を紹介した。西野春雄所員の執筆。

国内留学生の受け入れ

52年10月から53年3月まで、堀越善太郎東海大学助教授が、国内留学の主要研究機関として当研究所を利用、資料の調査研究にあたられた。堀越氏は「能楽資料展」の準備等にも協力していた。厚く御礼申しあげる。

研究会活動

能楽懇談会(代表委員・横道萬里雄)の研究部会(代表・表

章)では、『幸正能口伝書』の輪読会に引き続き、51年4月から『舞芸六輪』の輪読を毎月一回(午後6時〜9時)開いているが、当研究所は会場を提供し、また発表担当者の資料調査に便宜をはかっている。

〔所員研究業績〕

表 章

| | | |
|------------------------------|--------------|--------|
| 能楽と武道 | 武道1〜8月号 | 51・1〜8 |
| 作品研究「柏崎」 | 観世11月号 | 51・11 |
| 世阿弥―古典の中の間像―高校クラスルーム(旺文社)1月号 | | 52・1 |
| 大和猿楽の「長」の性格の変遷(中) | 能楽研究3号 | 52・3 |
| 観世新九郎家文庫目録(中) | 能楽研究3号 | 52・3 |
| 薪猿楽の変遷(上下) | 観世7・8月号 | 52・7・8 |
| 間狂言の変遷―居語りの成立を中心に― | 鑑賞日本『謡曲狂言』 | 52・8 |
| 世阿弥の能楽論 | 前衛10月号 | 52・10 |
| 観世大夫元雅小考―大夫号の意義の変遷― | 〈研究・十二月往来26〉 | 53・1 |
| | 鉄仙261号 | 53・1 |
| 西野春雄 | | |
| 〔資料紹介〕藤田家蔵『古今稀能集』 | 芸能史研究53号 | 51・4 |
| 作品研究「雲雀山」 | 観世5月号 | 51・5 |
| 「いろは作者注文」の異本(研究・十二月往来18) | 鉄仙247号 | 51・10 |
| 作品研究「吉野天人」 | 観世3月号 | 52・3 |
| 能界展望(昭和50年) | 能楽研究3号 | 52・3 |
| 世阿弥以後の作者たち | 鑑賞日本『謡曲狂言』 | 52・8 |
| | 古典文学 | |

| | | |
|---|----------------------|--------------|
| 「定家」をめぐる——〔明星定家〕のことなど—— 〔研究・十二月往来25〕 | 鏡仙258号 | 52・10 |
| 昭和51年度国語 国文学界の展望 | 中世(演劇) 文学・語学8081号 | 53・3 |
| 片桐 登 | | |
| 廃曲『狭衣』メモ | 能研究と評論6号 | 51・7 |
| 『下間少進集Ⅲ』〔能楽資料集成6〕(校訂) | わんや書店 宝生2月号 | 51・8 52・2 |
| 慶長二年宝生座支配之事 | 能楽研究3号 | 52・3 |
| 江戸時代初期素人能役者考——〔役者目録〕 を中心に—— | 能楽研究3号 | 52・3 |
| 研究展望(昭和50年) | 宝生3月号 | 53・3 |
| 宝生座の歴史稿(一) <small>近世初期の宝生座を中心に</small> | | |
| 古川 久 | | |
| 幕末の観世勸進能 | 能楽研究3号 | 52・3 |
| 「武江年表」と能楽 | 宝生5月号 | 52・5 |
| 「武江年表」と能楽・補正 | 宝生6月号 | 52・6 |
| 「武江年表」と能楽・拾遺 | 宝生7月号 | 52・7 |
| 江島伊兵衛氏の鴻山文庫 | 法政23月号 | 53・3 |
| 竹本 幹夫 | | |
| 〔口頭発表〕天女の舞考 | 日本中世文学会春季大会 | 52・5 |
| 《祝言謡》と謡故美〔研究・十二月往来24〕 | 鏡仙257号 | 52・9 |

〔受贈図書〕

- 単行本(受入順。*印は寄贈者)
- 神楽歌 催馬楽 梁塵秘抄 閑吟集〔日本古典文学全集25〕
- 白田甚五郎・新聞進一校注・訳 *小学館
- 九段下より 佐藤芳彦 *わんや書店
- 和歌文学の世界四 和歌文学会編(*田中允氏) 笠間書院
- 海 靈 *宮越賢治 戦没船員の碑奉賛会
- 未刊謡曲集25・26・27・28・29 *田中允編 古典文庫
- 能を愛する 那須辰造 *わんや書店
- 世阿弥芸術論集〔新潮日本古典集成〕*田中裕校注 新潮社
- 能の扇 *中村保雄 フジアート出版
- 能・狂言入門 *松田存 文研出版
- 能 二百四十番 野上豊一郎 *能楽書林
- 狂言辞典 事項編 *古川久*小林責*荻原達子編 東京堂出版
- 国立劇場十年の歩み 国立劇場編 *国立劇場
- 謡曲五番 徳江元正編 *桜楓社
- 狂言論考 *田口和夫 三弥井書店
- 西海道(二)〔江戸時代図誌23〕 原田伴彦・山口修編 *筑摩書房
- 中世評論集〔鑑賞日本古典文学24〕 角川書店
- *福田秀一 *島津忠夫 *伊藤正義編
- 演劇年報 一九七七*演劇博物館 早大出版部
- 和漢書分類目録 *大阪女子大学国文科編 大阪女子大学
- 神戸の民族芸能〔神戸市文化財調査報告書19〕車の翁舞と雨乞拍子踊編

- 神戸市の民族芸能(神戸市文化財調査報告書21)兵庫・北編 *神戸市教育委員会
- 神戸市教育委員会 *神戸市教育委員会
- 神戸市教育委員会 *神戸市教育委員会
- 宮尾しげを *檜書店
- 金閣と銀閣(人物群像日本の歴史8) *学習研究社
- 井上靖・和歌森太郎・尾崎秀樹監修
- 中世歌論と連歌 水上甲子三 *水上春子
- 謡曲・狂言(鑑賞日本古典文学22) *小山弘志 *北川忠彦編 角川書店
- 幸流小鼓正譜 幸 祥光 *能楽書林
- 芸能の科学 芸能部編 *東京国立文化財研究所
- 能の歴史(平凡社カラー新書78) *小林 責 *増田正造 平凡社
- 高安流大鼓序之巻 安福春雄 *能楽書林
- 改正能訓蒙図彙(宝暦十二年一月刊 膳所市 *斎藤武生氏)
- 八拍子文化(二年正月刊(下)) //
- 観世小謡万歳楽(文政六年刊) //
- 御能組残関(写) //
- 宝生流謡本「三輪」(明治36年6月刊 腕屋謡曲書肆) //
- 宝生流謡本「東北之巻」(明治44年10月刊 腕屋謡曲書肆) //
- 雑誌その他 (*印注記以外は発行所からの寄贈)
- 青山語文 第6号~第7号 青山学院大学日本文学会
- 跡見学園国語科紀要 第24号~第25号 跡見学園
- 跡見学園短期大学紀要 第12号~第13号 跡見学園短期大学
- 梅 若 第215~第225号 (51・4~53・3) 梅若会

- 英文学評論 第35号 京都大学教養部英語教室
- 演劇学 第17号 早稲田大学演劇学会
- 演劇研究 第7・8号 早稲田大学演劇博物館
- 音楽関係新聞記事索引(一九七一~一九七四) 国立音大図書館
- 春日丘論叢 第17・18・19号 大阪府立春日丘高校職員研究部
- 華泉 第27号~第29号 狂言和泉会
- 観 昭 第7巻4号~第9巻3号(51・4~53・3) 観昭会館
- 観 世 第43巻4号~第45巻3号(51・4~53・3) 檜書店
- かんのう 第214号~第225号(51・5~53・3) 大阪能楽観賞会
- 喜 多 51年夏~53年冬 十四世六平太記念財団
- きたぐに 51年4月~53年3月 北国川柳社
- 橘 香 第23巻7号~12号(52・7~12) 梅若研能会
- 狂 言 第87号~第188号(51・4~52・5) 名古屋狂言共同社
- 拱 星 第5号~第7号 拱星社
- 研究紀要 第6号~第9号 武蔵野音楽大学
- 国語国文学 第13号 東京学芸大学国語国文学会
- 国語国文学会誌 第20号~第21号 学習院大学国文学会
- 国語国文研究 第56号~第58号 北海道大学国文学会
- 国文学 第53号~第54号 関西大学国文学会
- 国文学―解釈と鑑賞― 第52巻2号(*西野所員) 至文堂
- 国文学漢文学論叢 第107号 東京教育大学文学部
- 国文学研究資料館報 第6号~第9号・別冊 国文学資料館
- 国文学論集 第11号 上智大学国文学会
- 国文目白 第15号~第17号 日本女子大学国語国文学会

| | | |
|--------------|-------------------------|---------------|
| 国文論稿 | 第4号～第6号 | 岡山大学国文学研究室 |
| 語文 | 第33号 | 大阪大学国文学研究室 |
| 金剛 | 第95号～第101号 | 金剛雜誌会 |
| 時衆研究 | 第65号 (*中村 格氏) | 時宗文化研究所 |
| 女子大文学 (国文編) | 第27～28号 | 大阪女子大学国文学研究室 |
| 書陵部紀要 | 第27号・第28号 | 宮内庁書陵部 |
| 人文研究 | 第26号 | 大阪市立大学文学部 |
| 清葉 | 第12号～第19号 | 清葉会 |
| 前衛 | 第416号 (*表所員) | 日本共産党 |
| 大学時報 | 第26卷7号 | 日本私立大学連盟 |
| 遂次刊行物目録 | 昭和四十九年版 | 国立国会図書館 |
| 中央大学国文 | 第19号～第20号 | 中央大学国文学会 |
| 中世文学論叢 | 第1号・2号 | 東京学芸大学中世文学研究会 |
| 鍊仙 | 第243号～第261号 (51・4～52・3) | 鍊仙会 |
| 伝統芸能 | 第249号～第272号 (51・4～52・3) | 京都伝統芸能懇話会 |
| 東京芸術大学音楽学部年誌 | 第2・3集 | 東京芸術大学音楽学部 |
| 二松学舎大学人文論叢 | 第10号 | 二松学舎大学人文文学部 |
| 能 | 51年4月～53年3月 | 観世能楽堂 |
| 能 | 51年4月～53年3月 | 京都観世会館 |
| 能 | 51年5月～52年12月 | 水道橋能楽堂 |
| 能 能楽協会報 | 第21号 | 能楽協会 |
| 能 研究と評論 | 第7号 | 月曜会 |
| 能楽タイムズ | 51年4月～53年3月 | 能楽書林 |
| 能楽の友 | 51年4月～53年3月 | 能楽の友社 |

| | | |
|-------|--------------------------|------------|
| 能楽評論 | 第13号～第25号 | 能楽評論 |
| 武道 | 第114号～第117号 | 武道館 |
| 文学・語学 | 第80・81号 (*西野所員) | 日本古典文学会 |
| 宝生 | 第25卷4号～27卷3号 (51・4～51・3) | わんや書店 |
| 山辺道 | 第20号・第21号 | 天理大学国語国文学会 |

能楽研究所図書閲覧の案内

○学生・研究者・能楽関係者・一般成人はどなたでも閲覧できます。ただし、閲覧の範囲が貴重本(古写本・古版本、寄託本等)に及ぶ場合は、学生は指導教授またはそれに代わるべき人の、能楽関係者・一般成人は研究者・所属団体等の、紹介状を必要とします。

○閲覧日は毎週の火・木・土曜日(祝日等を除く)で、閲覧時間は午前9時30分から午後4時まで(土曜日は正午まで)を原則とします。ただし、7月中旬から9月上旬まで、12月下旬から1月上旬まで、3月中旬から4月上旬までは、原則として閲覧業務を休止します。この期間に緊急の事情で閲覧を希望される研究者は、事前に了解をとって下さい。

○閲覧場所が狭く(8名が限度)、閲覧者が集中しますとお断りせざるを得ないことがあります。あらかじめ電話等で調査目的・閲覧希望図書を連絡して下さることを希望します。閲覧希望図書に貴重本を含む場合は必ず前日までに御連絡下さい。

〔編集後記〕

○昭和51年4月に寄贈契約書が交わされた鴻山文庫の移管の仕事が実際に始まったのは、52年3月になってからであった。先方の都合を優先せざるを得ない関係から、予定の変更が連続し、仮目録の作製、鴻山文庫印の押捺を経て、8月末によりやく搬入作業を終了した時には、夏季休暇を返上しての辛労と心労とで、所員一同、困憊の極にあった。休む間もなく、記念行事の計画を立て、その準備にとりかかったが、鴻山文庫本の整理と併行してのことであったから、これまた多忙を極める日々が連続した。10月末に無事記念行事が終了した直後には、さすがに虚脱状態であったが、さいわい、所員一同健康をそこねることもなくて、若干遅れはしたものの、紀要第四号の原稿を揃えることもできた。能楽資料集成や観世宗家蔵書目録など、鴻山文庫受贈の影響で遅れた仕事も、少しずつ取り戻せるであろう。

○今号には、長篇の論考二つを収めた。表の論文は第二・三号に続くもので、上中下合計二〇〇頁に近い。それだけの紙数を要するほどの問題がこれまでほとんど放置されてきたことに、能楽史研究の後れが象徴されていよう。竹本の論文は大学院時代からの考察の集大成であるが、一昔前には存在すら知られていなかった室町末期成立の各種伝書を駆使して、難解な問題に大胆な推論を展開している。これからの能楽研究の一つのあり方を示すものであろう。観世新九郎家文庫目録は前号で完結すべきものが延びてしまったものである。寄託後二年以内に目録を公表するはずのお約束を果たせなかったわけで、寄託者にはお

詫びの申し上げようもない。遅ればせながら完結したことでお許しを願いたい。学界展望と能界展望は執筆者が交代した。当初から担当を固定的に考えていたわけではないし、今後は別人が担当することもあるであろう。

○能楽研究所の図書閲覧規定を少々改めた。外部利用者の便宜のため休暇中もなるべく開所してきたものの、休暇中の利用者が激増して所員が休日を取れなくなったため、休暇中は閉所を原則とすることに改めたものである。特別の事情の場合は別途に考慮するつもりであるが、御諒承願いたい。(表章)

昭和五十三年七月三十一日 発行

能 楽 研 究 第 四 号

106 東京都港区南麻布二一八―四

編集兼 野上 法政大学能楽研究所
 発行者 野上 法政大学能楽研究所

所長 村上 直

印刷所 三和印刷株式会社
 長野市川中島一八二―一